

だいじゅうよんしょう 第十四章

きゅうしゅつ 救出

いっぽう かろう わかとの うでかざ み ぼしょ あんない わかとの いぬ にお
一方、家老は若殿を腕飾りを見つけた場所に案内しました。若殿は「犬に匂いを
か
い
嗅がせなさい」と言いました。

いぬ きぬ きれじ か ほ はじ みち そ はし はじ
犬は絹の布地を嗅がせられて、吠え始め、道に沿って走り始めました。

ま ちくしょう ようかい き
間もなく「畜生！妖怪が！」と聞こえてきました。

はや やつ に わかとの い
「早く！奴らを逃がしてはならない！」と若殿は言いました。

しゅえい わかとの とも にんじゃ おそ いっぽう にんじゃ とりで なか
守衛らは若殿と共に忍者を襲いました。一方、忍者の砦の中、ゆきはどよめき
おと き まど ほう い わかとの きつね わかとの たす
の音を聞いて、窓の方に行きました。「若殿さまです！狐さま、若殿さまを助
けてくださいますか」と頼みました。

きつね わかとの おとこ じぶん たたか じぶん
狐は「そのようなことはできません。若殿は男なので、自分の戦いは自分で
せん こた ま たたか
戦わければなりません」と答えました。「ここで待っていてください。戦いが
お きみ まも
終わるまで、君を守ります」

たたか お ま こた
「はい。戦いが終わるまで、ここで待ちます」とゆきは答えました。

わかとの しゅえい とも にんじゃ だいぶぶん と のこ にんじゃ に
それから若殿は守衛らと共に忍者の大部分を捕らえましたが、残りの忍者は逃げ
ました。

どの わかとの にんじゃ い
「ゆき殿はどこだ」と若殿は忍者に言いました。

いりぐち い
「ここです」とゆきは入口で言いました。

どの だいじょうぶ わかとの い お
「ゆき殿！大丈夫ですか」と若殿は言いました。「これを落とすのでしょうか？」
うでかざ み
腕飾りを見せました。

「あっ！それ、無くしてたんです。若殿さま、腕飾りを見つけて、返して下さ
って、さらには私をも助けてくださるなんて、本当にありがとうございます」
とゆきは言いました。

「礼には及ばん」と若殿は答えました。

「狐さま、私を脱獄させて、守ってくださってどうもありがとうございます」
とゆきは答えました。

狐は「どういたしまして。他にも君を守ってくれる人がいるようですね。もう
一度だけ僕を呼んでも構いません。頑張ってください」と言いました。

「がんばります」とゆきは答えました。

「ゆきさんと結婚するつもりです。もし、狐どのが結婚式に参加していただ
いたら、大変光栄です」と若殿は言いました。

「そうですか。普段なら私は人間の営みとは関係を持たないのですが、このお
嬢さんは特別です。きっと結婚式に参加できるでしょう」と狐は答えました。

[Yuki no Monogatari](http://www.TheJapanesePage.com) by Richard VanHouten
<http://www.TheJapanesePage.com>